

## 活動報告

## コロナ禍のロシアに行く（下）

ERINA 調査研究部主任研究員  
三村光弘

2021年10月7日～28日、ロシアを訪問した。今回の出張は、沿海地方での中口間の物流や観光の現状の調査、モスクワでの北朝鮮専門家との意見交換、ダゲスタン共和国でのロシア・アゼルバイジャン間の物流や人流の現状と観光資源の調査であった。最後にハバロフスク地方とユダヤ自治州の中口国境地帯を回った。今回はこのうち、モスクワとダゲスタン共和国、ハバロフスク地方、ユダヤ人自治州での記録を報告する。

## 感染者が急増するのにマスクの装着率が下がったロシア

10月13日にウラジオストクを出発し、モスクワへ向かった。ウラジオストクとモスクワの時差は7時間、飛行機の所要時間が9時間ほどなので、昼に出発して、夕方に到着した。機内はビジネス7割、コンフォート（プレミアムエコノミー）3割、エコノミー9割程度の着席率であった。9月中旬から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染者が急増し、1日あたりの新規感染者は1万8000人程度から2万8000人程度へと増加していたが、同年3月に訪問したときよりもマスクの装着率は下がっていた。これはウラジオストクでもモスクワでも同様で、ダゲスタン共和国ではマスクを装着しているのは、公務員や飛行機の客室乗務員、店員、ウェイターなど、サービスを提供する側だけで、一般の人々は屋外ではほとんどマスクをせず、役所や銀行などはほとんどマスクをせずにのみマスクをしている状態であった。ウラジオストクにある極東連邦大学では学内（自分の研究室は除く）での教員のマスク装着率がほぼ100%であったのに対し、学生の装着率は教室で30%、廊下だと20%あるかどうかであった。

エアロフロート国内線の飛行機の中では、3月と同じく、約4時間ごとに1回マスクの交換タイムがある。3月には、飲食中を除き、マスクを外しているとやんわりと、しかし確実に注意されたが、10月に乗ったときには、搭乗時にマスクを着けていない客にはマスクを手渡すだけで、席に座ってからマスクをしていないからといって注意することはしていなかった。

写真1はモスクワの街頭を歩く人たちであるが、屋外ではほとんどの人がマスクを着けておらず、付けている人の割合は10%程度であった。地下鉄の車内では、屋外よりも装着率が上がる。特に通勤・通学時間帯には、約半数の人がマスクを付けているが、それほど混雑していない時間帯には、写真2や写真3のようにマスクの装着率が低い。3月に訪問したときと同じか若干少ない位であった。写真3のように、飲み物を飲んでいる人は3月には見かけなかったが、10月にはあちこちで見えるようになった（写真3には2人写っているが、これは多い方）。

筆者がダゲスタン共和国に行っている間に再び部分的ロックダウンが決定された。10月28日～11月7日を「非労働日」とし、食料品店や薬局など、生活必需品を販売する店以外は店内営業を禁止することになった。筆者は10月23日にモスクワからハバロフスクに行ったが、出発前日の10月22日に市内中心部のチェコビールを飲ませるビアホールに行ったところ、自粛で人がほとんどいないかと思いきや、10日にわたってレストランの店内飲食ができなくなることが決まったので、その前に飲んでおこうという人々で満員だった。数十人のグループで来ている人たちも多く、日本のようにマスク会食などという概念もなく、マスク

写真1 モスクワの街頭を歩く人たち



(出所) 筆者撮影

写真2 モスクワの地下鉄の車内で



(出所) 筆者撮影

写真3 モスクワの地下鉄の車内で



(出所) 筆者撮影

なしで口角泡を飛ばしながら会話や即興のダンスなどを楽しんでおり、大盛況であった。これが東京であれば、テレビが取材に来るくらいの「惨事」となったのではないだろうか。

## 便利だけちょっと恐ろしい電動キックボード

今回、モスクワ市内のあちこちで目にしたのが写真4のようなレンタルキックボードだ。筆者が利用したのは WHOOSH (<https://whoosh.bike/>) というサービスで、基本料金が50ルーブル(約80円)、従量制の時間料金が1分あたり5~8ルーブル(約8円~12.8円)とお手軽で、よく利用する人のために1週間199ルーブルで基本料金が1日10回まで免除になるサブスクリプションサービスもある。その他に YandexGo にも同様のサービスがあり、タクシーを利用するためにアプリを利用している人であれば、電動キックボードもレンタルできる。基本的にスマホにアプリをインストールして、キックボードを予約したり、選んだり、鍵を開けたり、返却したりができるシステムとなっている。

### 写真4 モスクワの街頭にあるレンタル電動キックボード



(出所) 筆者撮影

### 写真5 繁華街にはレンタル電動キックボードがあふれている



(出所) 筆者撮影

このレンタル電動キックボード、地下鉄の出入り口付近や繁華街の入り口近くにはあちこちに止まっている。写真5は市内中心部の歩道の状況だが、これは割合「上品な」停め方で、実際には通行の邪魔になる場合もある。

使い方としては、目的地の近くまで地下鉄で移動し、そこでレンタルして目的地まで行くという使い方が一般的なようだ。モスクワの地下鉄は路線が市内から放射状に広がって郊外に行くので、5号線(環状線)や市内の乗換駅を使って乗り

換えが必要になるが、自分が使っている線の市内中心部で降りて、そこから数キロの道のりを電動キックボードで行くとかかなり時間の節約になるようだ。筆者はトレンチコフ美術館の近くから、ポリショイ劇場付近まで、モスクワ川を渡って行ったが、地下鉄6号線から7号線に乗り継ぎと徒歩で行くよりは早く到着し(20分ほど)、かつ赤の広場付近の風景を楽しみながら移動することができた。

ロシアの交通法規では、電動キックボードを具体的に規定する条項がなく、グレーゾーンとなっている。運営会社は自転車であると解釈している。死亡事故も含め事故がかなり多く、市内中心部では時速15キロに制限される区間もあり、GPSで場所を検知して自動的に減速するようになっている。車道を走れば車に追われ、歩道を走れば人をよけないといけないため、車道では時速30キロくらい出て、歩道では時速10~15キロに制限されるといのだが、そこまで繊細なコントロールは難しいようだ。

## コロナの陰が薄かったダゲスタン共和国

10月16日にモスクワからダゲスタン共和国の首都であるマハチカラに飛んだ。空港からは2003年に世界遺産に指定された「デルバントのシタデル、古代都市、要塞建築物群」のあるロシアで最も古い街といわれるデルバントへと向かった。ダゲスタン共和国の面積は5万平方キロメートル強、人口は273万人ほどで、面積は新潟県の約4倍、人口は50万人ほど多い。

### 写真6 デルバントのシタデルを訪れる観光客



(出所) 筆者撮影

デルバントのシタデルには毎日多くの観光客が押し寄せていたが、主としてロシア国内の観光客が多いように感じた。デルバント市内に止まっている外国ナンバーの

車はアルメニアナンバーが一番多く、次に隣接するアゼルバイジャンのものであった。乗用車はアルメニアナンバーが多く、トラックはアゼルバイジャンナンバーが多い。アゼルバイジャンとの国境地帯の税関は一部閉鎖しているが、開いているところもあり、トラックが行き交っていた。

### 写真7 アゼルバイジャンとの国境地帯の村で



(出所) 筆者撮影

筆者が訪問していた10月16日~22日の間、ダゲスタン共和国では新規感染者が120人前後と、1万人を超えているモスクワと比較すればほとんど COVID-19の影響を感じない程度であった。写真6のように観光地では比較的密になっていたが、屋外でマスクをする人は10%行くか行かないか程度で、レストランなどで客がマスクをしているのはほとんど見なかった。モスクワやサンクトペテルブルクなど、都市部(イコール COVID-19の感染者が多い)から来るお客は、ワクチンパスポートか PCR検査や抗原検査の陰性証明書がホテルの宿泊に必須ということになっていた。実際にはそういう決まりになっているだけで、有名無実化しているようで、モスクワ到着時に検査を受け、事前に陰性証明書のPDFをホテル予約アプリで送った筆者には、「(」)」(ロシアでは笑顔は「(」)で表す)と返事が来た。チェックインの時にも確認されず、それほど厳しくチェックしているわけではないようだった。

### 写真8 ソーシャルディスタンスを呼びかける看板



(出所) 筆者撮影

写真8はマスクを着け、ソーシャルディスタンスを取るよう勧める宣伝看板であるが、普段の生活でマスクを着けなければならないのは、役所や銀行、郵便局の屋内だけであった。

### ユダヤ人自治州の中口国境地帯を訪問

10月22日にダゲスタン共和国からモスクワに一旦戻り、10月23日の夕方、モスクワを出発してハバロフスクに向かった。ハバロフスクは極東時間なので、モスクワとの時差はウラジオストクと同じ7時間だ。東向きに移動するので、夕方に出発すると時差の関係で翌日の朝に到着する。ハバロフスクでは大ウスリー島を訪問して、中国国境のすぐそばまで行ったが、国境地帯なので、写真撮影はできなかった。

今回は中口国境地帯を回ることが主目

的であったので、ユダヤ人自治州のアムルゼドに行く手続き(国境地帯の訪問)をして、訪問した。アムルゼドの(アムール川／黒龍江)対岸は中国の黒龍江省鶴崗市蘿北県名山鎮だ。写真9のように、アムルゼド周辺にいる動物は、当たり前のことだがヒグマやイノシシをはじめとして中国東北部にいるものと同じであり、日本でもおなじみの動物たちであった。

写真9 アムルゼドの博物館の地域の動物の分布に関する展示



(出所) 筆者撮影

ユダヤ人自治州には1928年からソ連の欧州部(ウクライナ、ベラルーシ、ロシア西部)からユダヤ人入植者が移住を始めた。アムルゼドでは、入植の初期、アムール川の上流から筏で川を下り、その筏に使った丸太を材料として家を建てたそうだ。街はずれに行くと、写真10のような、築90年ほどの丸太小屋がいくつか残っており、当時の様子が偲ばれた。

写真10 アムルゼドの初期の入植者が建てた丸太小屋



(出所) 筆者撮影